

繪本甲越軍記三編
七

2258
31



八遠 13
2258
卷 31

池



繪本甲斐軍紀三編卷之七

目録

時回合戦之事

武田勝頼回島乱之事

長尾越前守政景退之事

宮松小山田と戦ふ事

小山田が祖先滝山より主従の約なる事

小山田栗原戦創と憂死之事

望月甚八政景と突圍

戦記三編卷之七



敵

繪本甲絨軍記三編卷之七

時田合戦事

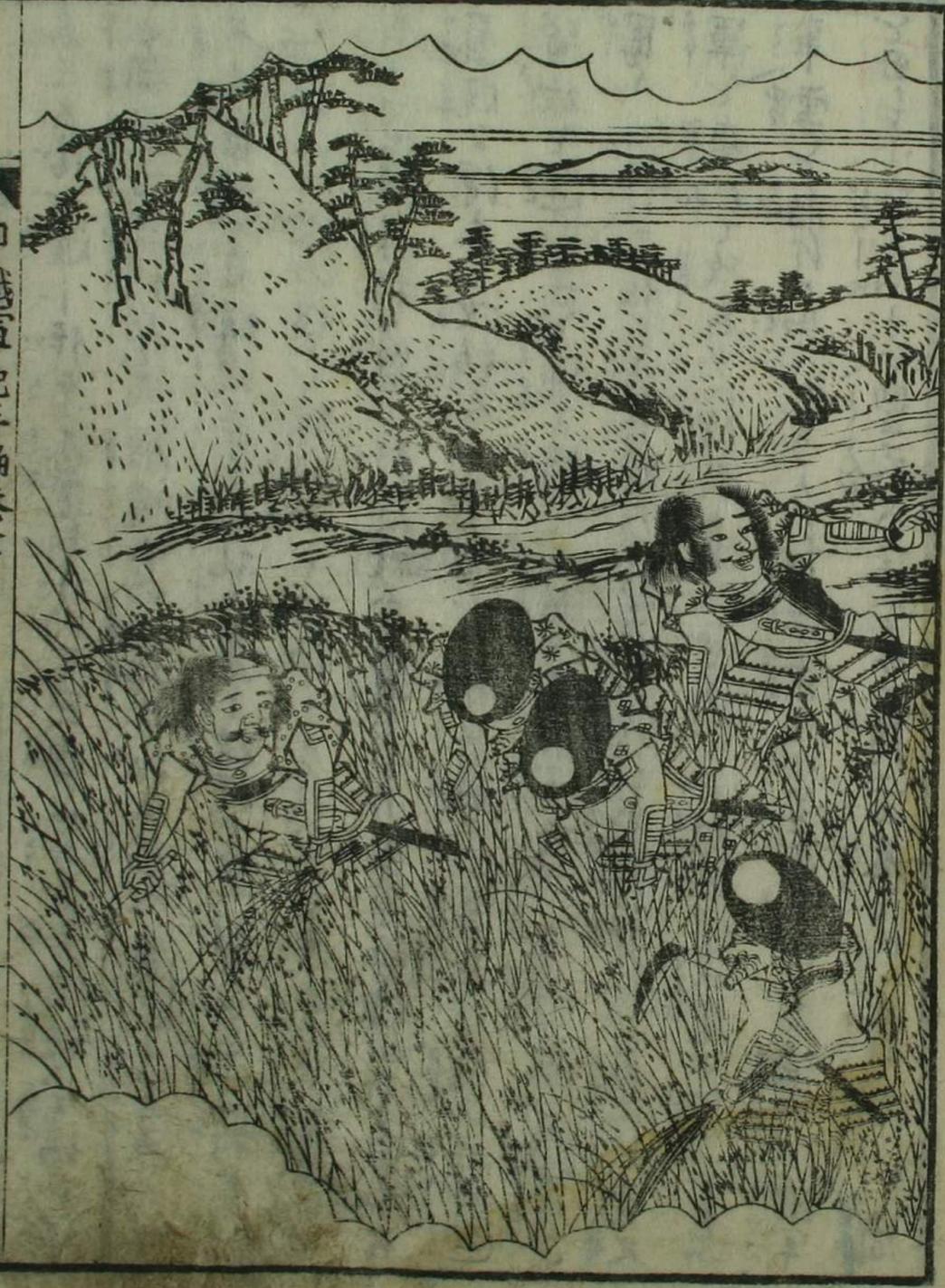
第

三略より兵法用ふの要ら先敵の情と察し其倉庫と視其
 糧軍と度り其強弱試する其天地と察し其空隙を伺ふ
 武田大膳を夫晴信入道信玄ハ小笠原城討滅し天文二十
 年三月より四月を信濃國小笠原向の早苗に極田收
 耗し麦作と換して戦いをるじと早苗に敵攻に出合され
 引同拜八月小又信州極訪に發向あつて十年に敵地を分り
 秋毛と換し民屋と放火し或は乱防せり敵地を
 糧軍と減し小い伊奈の方をたる助信警に諸大に討て發
 向りぬ本曾の方より民田兵庫助信守小繩無理助又味



板垣信里勅氣と崇る事并山岩間大膳九清門が支
 上松憲政管領職を彌信に譲事
 河原原合戦之事

与祿倉竹把と造る用る圖



甲越軍記三編卷七

本と云
武田勢
乱る
乱る
乱る
同



甲越軍記三編卷七

与三々浦と遣一伴系本曾松本の三方勢分ちらるる
 少柳景政其利左衛門尉晴吉の兩将を松本筋へ發向小笠原大膳
 志長時が在棟深志まで乱入せんと拮据が事付て出今小村井と
 山根の村と燒拂ふと攻動一々小笠原方より軍勢と
 出する場中利が勢と救度戦ふと小笠原勢戦ふとふら
 履既深志と攻法んとて小深志中下の農高等以の外強勁
 質效と運び子と逆又懐く山林は遷をを信玄發馬あふ
 罵りられ大膳志長時大驚死州頃の合戦味方利る以上信玄大
 軍と率いて攻めらへ防戦難い程とて越後の長尾又加勢をよ
 車雪と飛んが如くありくれ景虎も小笠原をびか信州の地軍
 と出小六ヶ浦とて翌天文二十一年三月二日春日山と並發向のりて同

八日信州時田二着一州送りの民屋と放火一或々士率とて
 民屋と礼妨と事大方も終る武田家より景虎が初聲と
 何んが敵後境は多くの間者と付あられ州者共より早系虎が出
 陣とて小笠原長尾が出張時し捨棄さ敵は景虎が謀
 略と指人と諸軍は解とて信玄も近習僅く早一討急と出馬り
 長江通ると押付給い時澤の阿方まで馳移し時景虎の小室乃
 押へ早引捕中仲間者より陣移し相と系虎と引取とて相は
 そんで八日の子の別は時田小着陣ありく係を武田が諸士將追ふ
 馳来り時時の間小大軍とありりりり此時長尾方より先陣長尾
 敵系を政系二千餘人権井清七郎を松内膳大時流系を平賞之七
 郎唐崎孫比郎とた右小笠原小連子と地前陣と別進る

甲越 三浦

採

敏速

敵

時大將景虎と武田勝頼は時田に出張するにまじり信玄が迅速の指
 揮軍略と威称し去つても信玄を進軍名將あり我おなごらるべき
 者へ信玄ありまぬが地にて戦人事味方の利あり速に軍勢
 と引よしと其おの子の切味入道伊菴とあし先信政系へい
 送ふも武田勝頼早時田をせ出張せりと賞へり其方子をも引
 敵と一戦早く引よしといひ送り給ふ此長尾誠宗も政系へ
 越前守所系が子と始め入郎と号はる天文六年系虎が足強
 た備前勝宗の子と系虎と戦いと交へが誠宗も勝宗の國弱
 あり足強と系虎の村鹿より軍兵引く本陣上田より指し
 が系虎足強と討く長尾の家督と継ぐ房系政系と和議
 長尾が師の後の方と取つて親戚を厚くし政系大別の勇將

底

驚

道田

甲越

して系虎がトよき將よりなれば景虎を程よ使らばひら
 程小今日と幸い小政系を見殺しとて縛り給ひて地理の利あり
 ざり武田の大軍と樹合せ景虎も地蔵峠より須坂までを
 引取り給ひたり武田勝頼も誠後勝の引とて小山田備中を
 去郊の彌が早雄の勇將勇士須坂系虎が引取り給ひて
 討敵せせし圍攻せしはれり追是れ小山田たを信守系
 た備前村信系入道一徳奇戸田下野守が軍勢足とて敵
 小山田が誠宗も政系も二將小信もやと同く圍と揚ぐ追是れ
 長尾誠宗も政系へ懸るれ一戦と進め給ひて大に怒り若し系虎
 小政行ど戦ひの政とやと眼と睨げ齒と咬つる三子信人
 一も小まき地蔵峠へ引取り給ひて大に怒り若し系虎と

甲越軍記三編卷二

四

毒

飯

陸

お

一坂と云り小鳥籠と約瓶と云く武田勢と云くと打倒し
 討つに不承不承と云く一哄と云く討つに其勇威破竹の如く
 進みし武田が先陣小山田飯富が勢と七割八裁と切捲き
 御りし飯富小山田が軍多き麻の如く乱れ四方小多しして
 小山田備中も大に怒り逃る味方とた右小引多し先は馬
 長尾惣の中へ馳入り者と幸しし不承不承は突伏た右小
 極威と云く戦へば長尾惣の中も右林一着を留固吉左衛門
 吉那依え清君烟吉左衛門今井田左衛門吉田清八郎那倉佐左
 等が始めに強先小令と搦に者十八人右負十四人高松内膳
 見とて後と云く馳入り一室小しきと備中も
 一とおとめ上階下段と戦し何と云く志久内膳が後
 塩

白

甲 638

より馬きと振る飛散し内膳透さば後承かると云く
 先鞍の示論と切廻しと儀と云く武田家とてさうも名と得し備中
 馬上小場と得たりと云く逆搦と云く御りし者飯富と那
 浦も落しと云く引退し是と云く小山田左衛門射来系
 九衛門射来系と云く弾道入道一徳高君同下出ると云く
 魚ると長尾政系事と云く世に喰ひ叫び強虎の勢と云く
 所始より難と云く也れ小山田栗系侍原良君同が軍と云く
 内小百七十騎討倒され右性左性より打乱し武田方より一騎
 呼し志村金助南条吉郎が支遣田中後守石言吉郎酒
 添き去浦去犯者強徳若定助左衛門等と結め強車



を

甲越軍記三編卷七

尉が海邊に於る右に寄んとし馬場民部少輔が勢を先と採へ
 討つからし方と断切彼方を隔て討つればさし味小勝りし長尾
 勢も山本乃鬼が奇討小馳退れん討つ者敢ては長尾越前守
 政系大に思ふ少智の奇兵に退れん見事さし只お放て断切
 せし下知とれども或は或百三百或は或八百の勢彼方此方と改
 りとらん士卒と共九小を備へ大將政系の勢中一文字お討
 りかた四方お備へ八方と突立れば長尾政系も痛く當りて戦
 ども侍多きが種勢を破りかき勢の勢を打崩し長尾勢は是より
 後一勢勢を引とれ味とさし引退くと武田勢退りて
 切不し退り討つれば長尾勢はさし引退ると武田勢退りて
 勢も山本乃鬼が奇討小馳退れん討つ者敢ては長尾越前守
 政系大に思ふ少智の奇兵に退れん見事さし只お放て断切
 せし下知とれども或は或百三百或は或八百の勢彼方此方と改
 りとらん士卒と共九小を備へ大將政系の勢中一文字お討
 りかた四方お備へ八方と突立れば長尾政系も痛く當りて戦
 ども侍多きが種勢を破りかき勢の勢を打崩し長尾勢は是より
 後一勢勢を引とれ味とさし引退くと武田勢退りて

止

敵

642
甲越

結ぶに討つ者多く於て今日長尾勢の討つ者七百十三人長尾
 越前守政系も勢を切つる古林筑後守泰時掃部監系又郎右衛
 僧妙全其部大將在島小寺郎右衛門二十餘人逃りて敵を打崩し
 り討死と政系も自ら敵十三騎を切り落し僅二三騎よりし
 らされて味と少勢を破り侍多きが一換侍多き兵部只一討死
 あり政系も討つからか政系も引退るの三頭も引退り後さぬ
 刀と扱つ切拂ふと蚤と馳通ればさし味とさし引退りて政系
 退りて是より引退りて是より引退りて是より引退りて政系
 と実人としてと政系も引退りて是より引退りて是より引退りて
 間を引退りて引退りて引退りて引退りて引退りて引退りて引退りて

甲越軍記三編卷七

九

相



とちまごせんと
 小山田が先祖
 滝山小五郎の
 物をあはれ園



日走置吉

九 強カ小引... 味よるとは... 引取り...

今日長尾... 武田方... 政系が... 有間... せられ... 系が軍... とうが...

新

助事... 事... 利... と勅... 小山回... 時... 滄... 子... 退... 却...

甲越軍記三編卷二

十一

唯此

あけり抄小山田が中緒と尋ねる武田の先祖を那信長武田の後
亂武田安藤も信宗より六郎安藤守時編が傳あり安藤守信
宗故有て落魄のめとあり甲州と出奔一箇吹流と越上野より
武蔵に至り山越えつるあよさはよむ時緩優波女塞が流と過へ
る信宗が顔と熟視て信宗が傍近く居たり何人かといはれ
と問ふ信宗答へて我も甲州の一小士して名もあはれ者ありとて
んとし後あつと聖押止めり小宮あつとも馬人とてえはつたと強
奪られ信宗聖に對いたる所遠く當國の人々とありはれ聖
頭とあり愚僧が生國を甲州の者しては君の沖安とて中は尋常
の人とも思われざり何ぞの所用もなき僧とていへば色まば
やとせ給へといは信宗相と問ふのうていあり今は何とて極らんや

鳴

645

旗

新羅三郎九代の後亂甲州の太守武田安藤守ありとて漂泊ありし
次舟と稱り給へり聖と指し扱を始よりとありぬ所形勢とて
流は南運ありていり思僧が甲州於苗郡の産して小山田氏
と名を承り鳴呼がまゝといへども桓武天皇の末流して平氏の者く
君ら本國の至るれば此法師が流小も主君あり何ゆてもあはし
用ひりありていへり身命と擲り仕へりんとていへば信宗大に悦び
流は物に汝は女とれなき事のはり秋國を去る時武田家の宣代
の家寶御蘇弁指一人を棄てんとておろし甲州境の山の後大松
の根を穿り埋め置上り落葉と撞り門を掩ひ籠せり汝彼不又あり
而もあて得させよ汝持たせよ人も人も見給とて侍られ彼僧は

甲越軍記三編卷二

十一



日本書紀卷之三十一

望月甚八
政景を
突圖



日本書紀卷之三十一

ノ

甲州軍記

十三

領掌一やがて甲州より越後山を経て沖の旗を置と取らぬ山に
 信宗と執りつれば安藤もまた悦び我本と違へば子孫に
 甲州とあふとて英約ありつらうが後信宗甲州より引ひ示代
 の國と治め給ひ後重と出され給ふ那とて与らるる是より那内と
 給へ那内那に在る一那内の小山田と号し信の字と賜ひ
 今弥三郎と信茂と号し又粟末左衛門詮冬も去る時田合戦
 深きと歩あり四又日とて記を嫡子に近き二右騎の組と許退
 くれども信玄免し給ひ先代の如く侍らるる事もた近進進
 侍一々間百騎と今迄の如く御所を而侍と春日深又即は給ひ
 た近進が中条神女ありとてたまに侍あぶらまらるる事
 板垣信里勳氣の事并岩間大藏の事

ノ

今般時田合戦の初は旗本の赤備へ馬場耳利内者板垣の四より
 一が山本道鬼合戦の汐と見接り赤備の四より謀略と談し軍と
 造り不耳利内者場の二將軍と出し粉骨と爲りて勝利と
 得る小幡り板垣弥二郎信里と軍と出さるる事と空しく見物
 たる事信玄怒り給ひ板垣車返訪の那代として放味方の勇
 ありおがと酒宴遊興の事あり軍事とあり法福寺合戦
 にも虚病と構へ出陣とあるは小山田も軍とあり世に成る場内
 等と板垣年若ありとあり若戦拒む弥二郎壯士とて是れ
 信宗小見かゝり又耳利左衛門尉も年若ありとあり板垣の戦
 功とあり我徒文救通とあり弥二郎が組兵は被皮は名譽の勇士
 と多く持ち給へば一たびは名をかり駿河もが嫡子ありは信宗末孫箇

甲州

に
 敵

甲州軍記三編卷二

十五

別日の盃と取らば、懐徳として出さる。合戦時、飲み小山田が両腕
 長尾政家が勢と追蒐る時、大鹿を信門も懐徳として飲み、其の
 馬と出さる。政景大鹿とつよよ、合戦初、初戦の交り、
 と奮つて、大鹿を信門にあらぶと振つる。小鞍おて、進出と岩間
 が家士、赤馬の口より、こゝろ甲斐を、河原勢、此は君の河
 原にて、河原言の上、河原親属と盃を、あつた、勝致も、
 分、こゝろ、河原、進、去、終、小、世、交、河、原、名、ふ、く、ハ、君、の、河、原、
 河、原、切、腹、作、付、れ、ん、と、あ、定、あ、り、只、教、小、向、き、と、入、
 終、い、高、名、と、取、り、て、今、迄、の、汚、名、と、雪、が、終、へ、と、引、れ、と、大、鹿、
 大、鹿、門、耳、小、も、入、と、只、管、よ、る、と、取、り、と、遠、く、進、ま、の、信、言、云、
 も、岩、間、が、懐、徳、と、い、ふ、も、あ、ら、う、き、振、あ、け、は、右、老、の、人、く、を、

總

懐

石見岩間事、懐徳、感、一、透、く、取、ま、と、性、質、の、未、練、者、を、
 懐、方、か、一、統、ま、も、薄、代、の、者、と、飢、殺、も、い、な、れ、ば、加、合、し、き、
 役、と、付、べ、と、河、原、至、秋、の、上、河、原、國、の、大、身、小、身、の、侍、或、は、信、
 信、一、切、の、人、の、事、柄、の、役、と、今、で、も、い、の、信、言、云、の、仁、意、又、將、一、事、と、
 上、校、憲、政、管、領、職、を、禪、信、口、禪、信、口、事、
 又、東、國、の、管、領、職、と、上、校、と、つ、累、祖、と、大、藏、尉、と、出、て、二、十、世、の、
 孫、と、重、房、と、号、と、如、く、上、校、と、稱、と、重、房、四、世、の、孫、と、民、部、を、備、憲、
 願、と、云、謙、倉、足、利、基、氏、憲、政、と、執、事、と、せ、し、よ、う、世、々、お、繼、つ、て、
 足、利、家、の、執、事、と、上、校、右、亮、憲、忠、の、代、は、至、く、上、校、の、執、事、長、尾、
 大、鹿、門、尉、昌、賢、の、子、長、尾、大、鹿、門、尉、宗、信、の、祖、と、勸、め、て、上、校、又、管、領、職、と、繼、し、め、系、

甲越軍記三編卷七

十六

於小養一たま浦督二任三正四位下小叙と足利持成赤子成氏結成四郎
 成飛と謀り上杉右亮憲忠と殺し是小養の族憤激し
 鎌倉へ遊士率と催して成氏と合戦し上杉玄部が浦房が成氏
 又戦し勝つて後倉又遷任し管領職と推稱し房の子氏部を
 於定上野國平井郷小養と築り鎌倉へ入る山内少佐と又上杉修
 理を史定心府を各々任し山内府を各の上杉と西管領と稱し於定
 が子氏部を浦房實管領職と継ぎ武州拜形の子居は上
 杉氏部を浦房独が子又郎憲房憲政管領職とついで黒代小養
 と唯雄と争ひ終りが孝天文十九年武回家より上杉の地へ
 と上野國の軍と出せしる小養を史氏康先代より上杉に
 地へ傳へんとせしむる今川義元と戦んで武回家より上杉へ軍と

抄

出は事と共氏康よりして上杉と妻討事急あれは上杉憲政竟
 又戦ひ負傷威妻へ方使あられ天文二十年憲政上野國と去り
 越後小養より上杉の姓名及び管領職と長尾平三系丸を譲り
 与へ小養と討てく本意と違せん事とせしめしる是荒脱び
 疎容して長尾と改め上杉と号し神餘草人佐と系丸との世
 官途受領の事公認し終ひりれは足利義輝の奏達ありし
 系丸彈正少弼又任し従五位下又叙せしる管領深ふお弼上杉
 景房と名をあらは法伴ありて彌信と号せしる是荒号と不識
 公光と号し上杉憲政が親小養と弟と彌信憲政を以て上野
 國へ出張し上杉家の諸大將と軍議ありし小養を史と
 責討んとせし謀りむる家

日走真言三巻



田邊町三ノ宮

七

十

与根倉
 竹把と
 造る園



甲越町三ノ宮

敵

け北は洪焼と防に逼りて城と攻人車と深く思慮し士車と四方をきりて
竹藪多しと伐取せ一箇の窓楯と倦る其形鞍懸の如くして敵受れ
方小竹と把り捨付其長七尺と極く矢狭間と明内小足軽と令く洪焼
と防に遠も進退自中ししてかゝるべき時を進退すべきと然る退く
進退自中の器と他つと前を城と押出さるれば城中より敵の
器と知れ洪焼と約瓶よりけて打倒えんとせん竹把りして出せり
小用と為さる世器と城の上下追押付既石垣小取付小戸
進兵時又攻落えんと聲して攻多城の右面弥助防が小堀
さばいさ布敷と進拂えと城戸と八の字と南に文字を付て
敵小戦おく訊と引武田勢付入とんと喚り叫んで退まれば弥助再び
討て出之雄拂ひく敵と退まて引て入る事あれば討て出脱九度には

敵

及びよりあまも新と入替息を續せると討まれば右別當あり
と能も小笠原が援兵とたる助信懸が押への勢中交へられて援兵と
能らば其上後車等戦ひ疲れおの用なきとも思はれれば今も
落城を死なつと思ひ定め十三日城申すと各宿願の酒喜と
ひいおく出前と宗徒の城をと宗徒は城戸と開く
出まると敵と押破り今日と得り小戦せり爰小武田方と
系跡た津門射と敵の城將を田跡助と縁者ありたりが九度の
戦ひはなれなかり使者は馬場民部が備と備と備と備と
双車の九度なかりる名も今日も又敵と馳合せ敵と二人討つ
後車と持せれも勇人にて戦わたりる場耳利士車と勇れ城と偏人
事々今日小あり進めりと攻敵とおせ八方小あり馳遠い討合せ

敵

日 敵 三 敵 三

20

敵

叫んで戦へば城も殺声と励み奮って戦ふも其田が多勢小銃
 常れ城内小銃と引退くを田助助と少も獲るに遅兵と接し二十騎
 馬場が備は割く四方八回は精をく死人の山と築た城は目定
 一入るやうな家をも寄る大城あれを田と中小退取意四面より
 討て程のち田助ありと果共後率と多討せられ先城中は入る息
 と休むと獅子は驚るや接声と發し近付敵と難拂ひ道の血路
 を開け城中小引入んとするやとる場が軍規咬付て付入せんと透るお
 追ふけられ城兵も門と合せんと火水小あれと防げ其寄るも跡が
 上小押重う見れば城戸と押破つて昔と夢て入獲取跡た清の田とく
 城小系あつて城將を田と引とるやう声とつけて退蕩るを田助助
 取くは隙陰とるやうと引退て獲取が舟の輪と引つけて倒らん

鏗

桐

654

ととるは跡た清の田と引とるやうとを田が隙陰とたがのくもえよ近づれ
 引退られを田助助と引退とるやうと小機殺さんと信の上事い
 廻り引あつて馬が合小おびる時子足の獲取跡た清の田とく
 遊う一ふを田と致命処と遊られて弱るを引退て首と接聲と
 城のを田助助と引退とるやうと後率おとる城のあべき忽ち城の隙されぬ
 信まを凱歌と仰る新在東の城と破却し跡と破陣一の小機
 系跡た清の田と引退の強合小十回あつて首と獲る事十一級
 跡と城のを田助助と引退とるやうと威状と場ふ又世安の
 城責城兵堅固小持引えし間日敵と取むんは落城のりすド
 系跡た清の田と引退の強合小十回あつて首と獲る事十一級
 倉が隙行より出たりとて其書見たりと引とる

備

日走軍言三編卷七

七巻

下

本朝竹把とて城と攻る事出陣毎稱倉がユ支りて初は其
 製古よりある事公望とて牛竹把と稱と其名の不斗
 物と負て道路と修此器と成て城門虎口と遮る其形
 自然と斗小柄とて斗竹把と呼ぶらるる是て因は
 狭間と因る口と破る小其習いなり後世は及んで極竹把乃
 製法ありりあやう

沈清

再見

二り

繪本甲斐軍記三編卷之五

